

高校生の進路選択におけるペアレントクラシー の影響

鈴木慎之介

本論を取り上げた理由としては、大学で主に教育社会学などの授業を受け、教育機会の格差について知り、社会に出た際に多くの場面で重要であるだろう教育というものに格差が生まれてしまっているということに興味を持ったからである。

本論では、主に高校生の進路選択に着目しながら、ペアレントクラシーという概念と関わりを持たせながら、高校生の進路選択にどのような要素があるのかについて述べた。まず初めに、現在の日本において、ペアレントクラシー社会というものの現状を挙げた。その中で、ペアレントクラシーには富と願望という要素が深く関係しており、子どもの両親の学歴や収入が、子どもの進路選択に大きな影響を与えているということが分かった。親の収入によって、子どもの大学進学にどのような変化があるのかということや、親学歴によって子どもへの教育への考え方や大学進学を視野に入れるタイミングの違いについて知ることが出来た。また、親の収入や学歴によって進路選択が変わってしまうのであれば、そこには階層間での連鎖的な再生産や連鎖的な格差が生まれてしまっているのではないだろうかと考えた。

このようなペアレントクラシー社会の過熱を抑え、高校生の進路選択から見た教育機会の格差を抑えていくには公教育の充実が挙げられる。現代社会ではほぼほぼ当たり前とされている高校卒業までの費用の完全な無償化や、学校単体ではなく地域全体をターゲットとした支援制度の整備などを充実させることによって、公教育の充実の達成に近づくことが出来るだろう。また、新自由主義的なテストの点数だけを重視した教育内容ではなく、さらに幅広い教育内容の設定なども挙げられる。このようなアプローチを行い、格差の下層を公教育の充実によって底上げをすることで上と下の開きを抑えることが可能になるのではないかと考えられる。

教育は将来の選択に大きな影響を与えるものであり、子どもたちの選択肢を可能な限り広げるために、幅広く公平な教育を受けることが出来る環境作りが重要である。そのような充実し公平な教育機会の平等が、より良い社会に繋がっていかだろとうと考える。